

ルカによる福音書15章 「イエスとの食事」

1A 招きに応じる者 1-24

1B 病気を治す安息 1-6

2B 恵みによる招き 7-14

3B 応答しない者たち 15-24

2A 費用を考える弟子 25-35

本文

ルカによる福音書 14 章を今晚は学びます。私たちは、イエス様がガリラヤ宣教を終えて、エルサレムに向かわれている旅の中の話の話を学んでいます。

1A 招きに応じる者 1-24

1B 病気を治す安息 1-6

早速、1-2節を読んでみたいと思います。1 ある安息日に、食事をしようとして、パリサイ派のある指導者の家にはいられたとき、みんながじっとイエスを見つめていた。2 そこには、イエスの真正面に、水腫をわずらっている人がいた。

イエス様が、パリサイ派の指導者の家に招かれています。パリサイ派とイエス様との確執は、かなり前から始まっていましたが、それはあまり表に出てきていません。ユダヤ人の群衆もかなりイエス様に付いてきており、表立って反対すれば彼らの反感を買います。したがって、食事をするという儀礼は保っていたようです。時は安息日です。モーセの律法によって、一切仕事をしてはならないと定められており、また彼らは会堂に行って律法の朗読をし、そして家では食事をします。その中で、指導者の一人が同じくラビであられるイエス様を招いたようです。

14章は、この食事をイエス様とすることが舞台となっています。食事があり、そしてそこに招かれること、招待されることがテーマとなっています。ユダヤ人にとって食事は、「一つとなること」を意味していました。親密な交わりを示しており、その楽しみと喜びを表していました。実に、神の国は宴会をすることによって、その至福が現われます。「イザヤ 25:6 万軍の主はこの山の上で万民のために、あぶらの多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、髓の多いあぶらみとよくこされたぶどう酒の宴会を催される。」

実は既に、13章から食事をすることや、神の国での食事についてイエス様は話しておられました。「13:26-29 すると、あなたがたは、こう言い始めるでしょう。『私たちは、ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました。』だが、主人はこう言うでしょう。『私はあなたがたがどこの者だか知りません。不正を行なう者たち。みな出て行きなさい。』神の国

にアブラハムやイサクやヤコブや、すべての預言者たちがはいつているのに、あなたがたは外に投げ出されることになったとき、そこで泣き叫んだり、歯ぎしりしたりするのです。人々は、東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。」あなたがたは、狭い門から入らなければ、わたしとこの地上で食事をしていたとしても、神の国では入ることができないのだ、という警告をしておられました。

食事をする事、そしてそれに招かれることは幸いですね。律法では、和解のいけにえというものがあります。それは、いわば「バーベキュー」なのですが、祭壇に捧げる肉の脂身などを主に捧げ、残りを自分が食べます。そのことによって同じ肉を神の受け入れ、また自分もあずかることによって、神と自分とが一つになること、結び合わされることを意味します。このことを考えながら、有名な黙示録 3 章の言葉を読むと、その意味をかみしめることができます。同じ釜の飯に預かるのです。「3:20-21 見よ。わたしは、戸の外に立ってたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいつて、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」

そして、神の国においては、王なるキリストの祝宴にあずかることが大事になります。今、読んだ箇所も 21 節に、「わたしの座に着かせよう」とありましたね。王の施す恵みに預かり、そして自分自身も王のものを自分のものにしていくことができる、という恵みがあります。ダビデがヨナタンの息子、メフィボシェテに施した恵みを思い出してください。ダビデは、サウルの地所をメフィボシェテに回復させました。王の食事に預かることによって、王の持っている特権にも預かることができるのです。このような、大きな霊的意味をユダヤ人の取る食事には存在することを知ることはいちでしよう。

しかし、ここでそのような食事の意義とは裏腹の、悪い空気がありました。イエス様の前に、水腫を患った人がいたのです。当時、ユダヤ教のラビの家には、知らない人々が入ってきていました。招かれた人しか食事にあずかることはできませんが、ラビの教えることを聞くためにこのように入ってくることはできたのです。以前、パリサイ派のシモンの方にイエス様が招かれて、そこに不道徳な女が入って、イエス様の御足を涙で濡らしたことを思い出してください。ですから、水腫を患った人もいるのですが、これはパリサイ派の者たちが意図的に彼をそこに連れてきたのです。それは、病気を治すという行為は安息日の「働いてはならない」という規定に違反するからです。

イエス様が、貧しい人、病んだ人の重荷を担われてきたことを彼らはよく知っています。そして、こうした病を治すことも彼らはよく知っています。イザヤ書には、メシヤがこうした病人を癒されることを預言しているにも関わらず、彼らは頑なにイエスがメシヤであることを拒みました。それは、彼らの教えていることが、イエスによって否定されたからです。13 章にも、イエスが安息日に、18 年間、腰を伸ばすことのできない女をまっすぐにしてくださり、会堂管理者がそれはしてはいけないこ

とだと言うと、イエス様は、「あなたがたは家畜に水を飲ませるではないですか。彼女は、アブラハムの娘なのです。それを18年もサタンが縛っていたのです。」と反論されていました。

3 イエスは、律法の専門家、パリサイ人たちに、「安息日に病気を直すことは正しいことですか、それともよくないことですか。」と言われた。4 しかし、彼らは黙っていた。それで、イエスはその人を抱いて直してやり、そしてお帰しになった。5 それから、彼らに言われた。「自分の息子や牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者があなたがたのうちにいるのでしょうか。」6 彼らは答えることができなかった。

イエス様は、彼らの悪い思いを見抜いておられて、かえってその疑いに対してご自分から疑問を投げかけられました。彼らが答えることができなかったのは、自分たちに矛盾があるからです。もし、良いことだと答えれば、自分たちの安息日についての規定に違反することになるし、もし間違っていると答えれば、こうした憐れみの行ないを阻むということをお認めることになります。分かっているのに、認めたくないから黙っているのです。

イエス様はこの直した者を、家に帰されました。おそらく、その後のイエス様のパリサイ人たちのとの議論から彼を守りたかったのもしれません。「自分の息子や牛が井戸に落ちたのに」とイエス様が言われます。このような基本的な憐れみの行為を、彼らも行なっていたのです。安息という意味について、彼らは目的を失っていました。食事が神との交わり、互いの交わりを示すなら、安息は、神の国の到来による癒しと解放を示しています。神の国が来ることによって、人々は罪から来る病や苦しみから解放されます。そこで初めて、魂の安らぎを得ることができます。キリストが十字架につけられ、罪から来る傷と病をその身に追われたので、罪の赦しと与えられ、また病の癒しも保障されます。神の国がその人に臨むのです。そして、キリストとの交わり、またキリストにある者たちとの交わりの喜びと与えられるのです。

先の不道德の女が、食事の席に近づいたところ、イエス様が罪の赦しを宣言されました。ですから、食事と罪の赦しや病の癒し、また神の国は相互に結びついています。ヤコブはこう言いました。「5:15-16 信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表わし、互いのために祈りなさい。いやされるためです。」

2B 恵みによる招き 7-14

7 招かれた人々が上座を選んでいられる様子に気づいておられたイエスは、彼らにたとえを話された。
8 「婚礼の披露宴に招かれたときには、上座にすわってはいけません。あなたより身分の高い人が、招かれているかもしれないし、
9 あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください。』とあなたに言うなら、そのときあなたは恥をかい、末席に着かなければならないでしょう。
10 招かれるようなことがあって、行ったなら、末席に着きなさい。そうしたら、あなたを招いた人が

来て、『どうぞもつと上席にお進みください。』と言うでしょう。そのときは、満座の中で面目を施すこととなります。11 なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

まだ、パリサイ派の指導者の家にいます。そこで、「招かれた人々が上座を選んでいる」ことにイエス様が気づいておられます。そして、その場は披露宴ではないですが、披露宴の警えを使って、彼らのしていることの間違いを指摘されました。招かれたのであれば、その招いた主催者に自分の座るべき所を任せればよいのです。ところが、自ら上席に着こうとすれば末席に着かなければいけない可能性が大きいけれども、招いた人に自分の席を任せる、つまり末席に座っていれば招いた人が、上席に導いてくれるかもしれません。

そしてイエス様は、聖書全体に貫かれている原則を語られます。「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」ここで「自分を高くする者」というのは、自分の力を強くする、というような意味合いがあり、自分を低くするのは逆に力や強さを低くするという意味合いがあるそうです。

ここで招き、という言葉に注目したいと思います。私たちはこの前の日曜日に、良い、忠実な僕について学びました。主人が召し出す、その召しに従って僕は動きます。主人が呼ぶから、それに応答します。これが僕の姿です。招きも、同じ原則が貫かれています。招いた主催者の裁量によって、その祝宴が動いていきます。自分の席も含めて、主催者の判断の中にあります。したがって、主催者に自分を任せるのです。そして専ら、神の恵みによって自分を生かしていただき、自分を用いていただきます。「1ペテロ 5:5-6 同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。」

そして大事なのは、神の恵みの中に自分を委ねることによって、真実な交わりを持つことができるということです。自分を強くしようとするところに、交わりはありません。神との交わりも、また互いの交わりもなくなってしまいます。

12 また、イエスは、自分を招いてくれた人にも、こう話された。「昼食や夕食のふるまいをするなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどと呼んではいけません。でないと、今度は彼らがあなたを招いて、お返しすることになるからです。13 祝宴を催すばあいには、むしろ、貧しい人、不具の人、足なえ、盲人たちを招きなさい。14 その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。義人の復活のときお返しを受けるからです。」

招かれた人々から、今度は招いた人にイエス様は語りかけられます。自分が恵みによって救わ

れて、恵みによって今の自分がいるのです。ですから、次に人々を受け入れる時は恵みによって受け入れなさい、ということです。神に、そのままの姿でキリストによって受け入れられたのですから、同じようにキリストによって他の人々に恵みによって受け入れていきます。条件付きで受け入れるのではなく、条件なしで受け入れるのです。そして、キリストによって恵みを分かち合うのであり、相手から何かを得られると期待して分かち合うではありません。

そして、見つめないといけない人はただ一人、主ご自身です。「義人の復活のときお返しを受ける」と言っています。これは、ダニエル書 12 章にある約束です。「12:2-3 地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。」イエス様も、ヨハネ 5 章で、「善を行なった者は、よみがえっていのちを受け(29 節)」とされています。この時に報いがあります。教会は、キリストが再び教会のために戻ってこられる時に、初めに死んだ人がよみがえり、生き残っている者たちが一瞬に変えられて、イエスご自身に会います。その時に、各人に称賛と報いが来ます。

ですから、私たちは絶えず、主人であるイエス様に目を向けて、この方に喜ばれるところの生活を送らないといけないということです。それによって神から恵みを受け、その恵みを他の人々に惜しまずに分け与えることができます。どうしても、自分を守ろうとして、捧げていくことが私たちではできません。へりくだった者だけが、自分自身を神だけでなく他の人たちに捧げることができます。

3B 応答しない者たち 15-24

15 イエスといっしょに食卓に着いていた客のひとりはこの話を聞いて、イエスに、「神の国で食事する人は、何と幸いなことでしょう。」と言った。

客の一人は、義人の復活について聞いた時に神の国を思いました。そして、今、食事の席についていますが、神の国において食事をするのを想起しました。この知識は正しいですが、残念ながらここにいる人々の多くは、神の国に入れなことをイエス様は語られます。

16 するとイエスはこう言われた。「ある人が盛大な宴会を催し、大ぜいの人を招いた。17 宴会の時刻になったのでしもべをやり、招いておいた人々に、『さあ、おいでください。もうすっかり、用意ができましたから。』と言わせた。18 ところが、みな同じように断わり始めた。最初の人はこう言った。『畑を買ったので、どうしても見に出かけなければなりません。すみませんが、お断わりさせていただきます。』19 もうひとはこう言った。『五びきの牛を買ったので、それをためしに行くところです。すみませんが、お断わりさせていただきます。』20 また、別の人はこう言った。『結婚したので、行くことができません。』

神の国に招かれても、その招きに応じないという問題があるのです。その理由は、畑を買ったと

ということです。つまり、自分の物質的な財産のことが招きよりも大事でした。牛もそうです、仕事や商売のほうが、招きよりも大事でした。そして結婚したというのは、伴侶のことが気になって招きに応答しません。

21 しもべは帰って、このことを主人に報告した。すると、おこった主人は、そのしもべに言った。『急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい人や、不具の人や、盲人や、足なえをここに連れて来なさい。』

先ほどイエス様は、貧しい人、病んでいる人、障害を持っている人を招きなさいと勧めましたが、ここでもこれらの弱い人々を神は、キリストの御国に招かれることを教えておられます。何がここで異なるのでしょうか？経済活動が出来、また結婚もできる人というのは、健常者です。障害を持っているので、そのようなことはできないのです。つまり、弱くされている人々です。弱くされているからこそ、その招きがあれば応答することができます。しかし、自分に財産がある、仕事がある、また結婚があるとすると、それ自体はもちろん悪いものではありませんが、それを神からの招きよりも優先する、という問題が出てきます。

これは絶えず、霊的に致命的な問題です。心の貧しい者が天の御国に入ることができます。子どものように小さくされている者が神の国に入ることができます。自分の生活にある自慢、高ぶり、その強さが神の国に入らせない妨げになるのです。

22 しもべは言った。『ご主人さま。仰せのとおりにいたしました。でも、まだ席があります。』23 主人は言った。『街道や垣根のところに出かけて行って、この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を連れて来なさい。24 言うておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は、ひとりもないのです。』

これは、招かれていなかった人々のことです。異邦人であります。ユダヤ人が福音を拒んだので、その招きが異邦人に及んだということです。これが異邦人の救いの完成まで続き、それからキリストの再臨の時にイスラエルがみな救われます。

イエス様は決して、心の狭い方ではありません。大勢の人をその祝宴に招きたいと願っておられます。祝宴が祝宴になるように、そこに祝福を受ける人々を置きたいのです。「狭い門から努力して入りなさい」とイエス様は言われましたが、それはイエス様が門を狭くしているのではなく、人々が心を窮屈にしているから、入らないのです。ここでも招かれているのに、それに応答しないから、食事にあずかることができません。

2A 費用を考える弟子 25-35

25 さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いてしたが、イエスは彼らの方に向けて言われ

た。

食事の席から立ち、そしてイエス様が出て行かれると、そこにいっしょに大勢の群衆が歩いていました。彼らの心をイエス様は知っておられました。当時は、ユダヤ教の中ではラビに付いていく弟子たちは、彼を自分の父のように敬愛していました。生活のことも、師から仰いでいたのです。しかし、イエスをラビとして仰ぐのであれば、心の覚悟が必要です。

26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。

イエス様は、ご自身がキリストであることを弟子たちが告白した後に、「自分の十字架を負ってわたしについて来なければ、弟子になることができない。」と言われたその言葉を、今、群衆にも話しておられます。ローマの十字架は、苦しみ象徴だけでなく、完全に自分をローマの権威に服従させている姿であります。自分を捨てなさい、と十二弟子には語っておられました。これは、禁欲的になる、自分を否定するということではありません。そうではなく、自分ではなくキリストが自分を満たす、ということでもあります。自分が少なくなり、キリストが多くなることです。ある人がアイドルを求めたら、アイドルだけになるというように、自分がキリストを求めたらキリストだけになる、ということです。

そして群衆に対しては、「憎む」という言葉が使われています。「自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎む」のです。この憎むという言葉は、感情的に憎むことを意味していません。「激しい、強い決断をする。」ということです。家族の絆ほど、この世において強いものはありません。その強さよりも、なおのことキリストとの絆を強くしなさいということです。その選択において、家族の絆を退けることが必要になります。家族を見捨てることではありません、むしろ養います。しかし、家族のゆえにキリストに従うのを控えるなら、キリストの弟子ではないのです。

28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。29 基礎を築いただけで完成できなかったら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、30 『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかった。』と言うでしょう。31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。

イエス様は二つの例えが使われていますが、同じことを話しておられます。共通しているのは、第一に「まず座る」ということです。何か行動を起こす前に、まず立ちどまって、座ることです。ここ

には、主の下に座ることという意味合いがあります。主の内に留まることです。まず自分が、主のところに留まっているかどうか、それをしなさいと言われていました。第二に、一つ目の例えにある「計算する」という言葉があります。これは、「思い巡らすこと」と言い変えることができるでしょう。損得を考えるのではなく、よくよく考えて、じっくりと主に従うことの意味合いを考えて、それで決断します。そして、第三に二つ目の例えにある「考える」ことです。これは、「自ら考えて、結論を出す」という意味があります。ですから、主との時間を持つために立ち留まり、それからよく思い巡らし、そして決断をするということでもあります。何も考えないでいる、漫然としている、流れに乗っているだけである、というのが群衆の特徴であります。弟子はそうであってははいけずと主は言われます。

33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。

今、建物の費用のことを話したので、イエス様は財産のことを話しておられます。財産も、キリストに従うのに妨げになる大きな要因です。「全部を捨てないでは」と主は言われていますが、それは「主に従う時に、財産が邪魔になるのであれば、そうであれば全部捨てても主に付いていく」という意味合いになります。これも優先順位の話をしているのです。けれども財産も私たちには、ものすごい強い力を持って、引っ張っていきます。だから「全部を捨てないでは」という強い言葉をイエス様は使われているのです。

34 ですから、塩は良いものですが、もしその塩が塩けをなくしたら、何によってそれに味をつけるのでしょうか。35 土地にも肥やしにも役立たず、外に投げ捨てられてしまいます。聞く耳のある人は聞きなさい。」

群衆から弟子になる時に、イエス様に付いていく本来の目的を達成することができます。塩が塩気を持っているようにするには、今の、自分の命を憎むという行為が必要なのです。自分ではなく、キリストです。自分はキリストの十字架にあるのだ、という信仰です。その恵みによって、自分は罪赦され、古い人も死んだのだ、という信仰です。その恵みによって生きる決心です。だから、自分にまわりつく重荷をかなぐり捨てないといけません。そして、信仰の創始者であって完成者である、イエスに向かって走らないといけません。この方が最後まで走る者に、褒美をくださいます。「よくやった、良い、忠実なしもべだ。」と仰ってくださいます。